

ダニエル書の聖なる「都 (עִיר)」と 聖なる「見張りの天使 (עִיר)」

矢 田 洋 子

1. はじめに

ダニエル書の MT (旧約聖書 Masoretic Text) は、ヘブライ語とアラム語の二言語で書かれている。MT のほぼ全てがヘブライ語で書かれているが、ダニエル書はヘブライ語とアラム語がほぼ半々の分量で¹⁾、「ヘブライ語 (1:1-2:4a)-アラム語 (2:4b-7:28)-ヘブライ語 (8:1-12:13)」と言語が2度切り替わってヘブライ語に戻って終わっている。その言語区分は、1-6章が宮廷物語、7-12章が黙示文書という文学類型区分ともずれている。このような二言語性は、ダニエル書研究において重要視され続けながらも、未解決のままである。

アラム語の使用自体については、ダニエル書の時代にはイスラエルの人々の言語はすっかりアラム語に変わり、ヘブライ語を理解するのは少数の宗教専門家だけになっていたからだと説明される。しかし、なぜ二言語なのかについては、様々な説が提唱されてきているが、決定的な見解はない。各部分でのアラム語／ヘブライ語の言語選択の理由に挙げられているのは、「偶然」「伝承素材

1) MT のほぼ全てはヘブライ語で書かれており、アラム語は全体の 1.5%程に限られている。ダニエル書以外には、エズラ記の4分の1程 (4:8-6:18; 7:12-26)、エレミヤ書に1節 (Jr 10:11)、創世記に2語 (Gn 31:47 ab の一句) だけにアラム語が見られる (MT のアラム語使用の割合は、BHS のページ数からの概算。全 1574 ページ中にアラム語は、ダニエル書に 18 ページ分、エズラ記に 4.6 ページ分、エレミヤ書に 2 行、創世記に 2 語のみ)。エズラ記のアラム語部分のほとんどは、異国の王との外交公文書の内容記述である。アラム語がこの時代の外交公文書の言語であった。しかしダニエル書は、外交公文書でもないアラム語の長文がヘブライ語と共存した形をしている。

のまま」「宗教的権威」などにすぎず、二言語の必然性を説明するものはほとんどない²⁾。

近年、社会言語学に基づいて、ダニエル書の二言語性を新しい文脈導入のための意図的修辞戦略とみる見方が報告されている³⁾。しかし、ダニエル書の場合、一般的な言語学的視点だけではなく、その二言語がアラム語とヘブライ語であることから来る特殊事情も見逃すべきではない。アラム語とヘブライ語は同じ北西セム語に属する言語で、確かに違う言語でありながら、文法的にも語彙的にもかなり似ている。類似の言い回しは、言語の違いを越えて自然に響き合うはずである。古代オリエント言語の文学では、一つの単語を二言語で読み取って二重の意味で読むなどの二言語言葉遊びも知られている⁴⁾。

2) 言語選択を説明する諸説には、次のものがある。1) 偶然：文書全体が元来ヘブライ語で書かれたが、一部失われ、ほぼ同時に作成されていたアラム語訳で補われた。A. A. Bevan 他。2) 宗教的権威づけのため：文書全体が元来アラム語で書かれたが、1章と8-12章については、他の旧約文書に加えやすいように、ヘブライ語に翻訳された。R. H. Charles, H. L. Ginsberg 他。3) 段階的な文書形成過程の反映：(2), 3, 4, 5, 6章はアラム語の伝承物語素材を組み込んだ結果。7章は、2章との強い対応によってアラム語。1章と8-12章は、最終段階で宗教的権威づけのためにヘブライ語。J. A. Montgomery 他。4) 意図的な二言語使い分け：アラム語は、異邦人の歴史に関心、民衆に分かるように。ヘブライ語は、イスラエルの神との契約に関心、宗教的知識層だけに特別な啓示を明かす。O. Plöger, H. H. Rowley 他。J. J. Collins, *Daniel: a commentary on the Book of Daniel* (Hermeneia) (Minneapolis: Fortress Press, 1993), pp.12-13; C. A. Newsom, *Daniel* (OTL) (Louisville: Westminster John Knox Press, 2014) pp.6-9.

3) ヘブライ語は宗教言語として主なる神との契約関係の文脈、アラム語は国際的言語として帝国の王との世俗的関係の文脈を導入するための手法と見ている。言語切り替えは、聴衆にその文脈を意識させる。ダニエル書がヘブライ語で語り始め、アラム語に切り替え、ヘブライ語で結語しているのは、帝国との関係が破棄され、神との契約関係だけが残るといふ新しい（最終的な？）文脈を聴衆に認識させるためだと説明している。D. M. Valeta, "Polyglossia and Parody: Language in Daniel 1-6," R. Boer ed., *Bakhtin and Genre Theory in Biblical Studies*, Society of Biblical Literature No.63 (Leiden: Brill, 2008), p.91-108; A. E. Portier-Young, "Languages of Identity and Obligation: Daniel as Bilingual Book," *VT* 60 (2010): 98-115.

4) S. B. Noegel, "Wordplay" in *Ancient Near Eastern Texts*, Ancient Near East Monographs 26 (Atlanta: SBL Press, 2021); S. B. Noegel, "Polysemy," in *Encyclopedia of*

本研究では、ダニエル書のアラム語部分とヘブライ語部分の間に意味の重ね合わせが仕組まれている可能性を示し、ダニエル書が二言語で書かれた意味を考察する。具体的には、ダニエル書4章のアラム語部分と9章のヘブライ語部分に3箇所ずつ、同音同綴語「イール (עיר)」が、聖なる(もの)を意味する「カッディーシュ／コーデシュ (קדיש / קדש)」との組み合わせで用いられていることに注目する。

ダニエル書4章 (アラム語)

「イール (עיר)」 = 聖書協会共同訳「見張りの者」、新共同訳「見張りの天使」

Da 4:10 עיר וקדיש (イールと聖なる者) が天から降りて来た。

Da 4:14 この要請は עירין (イールたち) の決定により、
この事柄は קדישין (聖なる者たち) の命令による。

Da 4:20 עיר וקדיש (イールと聖なる者) が天から降りて来る

ダニエル書9章 (ヘブライ語)

「イール (עיר)」 = 「都」

Da 9:16 עירך (あなたのイール), הֶרֶם קִדְשֶׁךָ (あなたの聖なる山) エル
サレムから……

Da 9:24 あなたの民と עיר קִדְשֶׁךָ (あなたの聖なるイール) に対して、
七十週が定められ……

Da 9:26 הָעִיר וְהַקִּדָּשׁ (イールと聖所) を次の君主の民が破壊する。

「イール (עיר)」は、ヘブライ語辞書では「町／都」を意味する女性名詞、ア

Hebrew Language and Language and Linguistics, Vol. 3, pp.178-186. 特に pp.180-181; E. L. Greenstein, "Wordplay, Hebrew", in *The Anchor Bible Dictionary*, Vol.6 (New York: Doubleday, 1992) pp.968-971. 特に p.971; G. A. Rendsburg, "Bilingual Wordplay in the Bible," *VT* 38, pp.354-357; S. B. Noegel ed., *Puns and Pundits: Word Play in the Hebrew Bible and Ancient Near Eastern Literature* (Bethesda: CDL Press, 2000).

ラム語辞書では「見張りの者／天使」を意味する男性名詞と記載されており、全く別の語と見なされて、同音同綴語であることには注意を向けられてはこなかった。しかし、ひと続きの物語の中にアラム語「イール」とヘブライ語「イール」がある場合、無関係に読むことは難しいのではないだろうか。どちらの「イール」も同語根 (צַרַּק) の類似語との組みになっているのなら、なおさら、アラム語的意味とヘブライ語的意味は響き合うはずである。

ダニエル書において、アラム語「イール」は全3箇所とも4章にあり、すべて「コーデシュ (צַרַּק 聖なるもの)」と組み合わせられている。ヘブライ語「イール」は全6箇所中5箇所が9章にあり⁵⁾、そのうち3箇所が「カッディーシュ (צַרַּק 聖なる)」との組み合わせになっている。

2. ダニエル書の全体構造における4章と9章の位置づけ

「イール」の集中する4章と9章は、文書の全体構造における位置づけが似ている。ダニエル書は、その使用言語から、1章（ヘブライ語）、2-7章（アラム語）、8-12章（ヘブライ語）に分けられる。4章（と5章）は、アラム語部分2-7章の囲い込み構造の真ん中あたり、王の苦難が「七つの時」だと告げている。9章は、ヘブライ語部分8-12章の囲い込み構造の真ん中あたり、エルサレムの苦難が「七十週」だという解釈を提示している。

【アラム語部分】

2章 夢解き物語 世界帝国の王権推移の歴史

3章 偶像礼拝強要-危機-救出（神は御使いを遣わし）—王による神讚美

4章 夢解き物語 王の滅びの宣言と滅び、悔い改めの祈りと回復

—「聖なる神の霊」ダニエル、「イール、聖なる者」(4:10, 14, 20)

—「七つの時」(4:13, 20, 22, 29)

5章 壁文字解き物語 王の滅びの宣告と滅び

5) Da 11:15 以外はすべて9章にある (Da 9:16, 18, 19, 24, 26)。

—「聖なる神の霊」ダニエル

6章 祈り禁止令-危機-救出（神が御使いを遣わして）—王による神讚美
7章 幻の解き明かし 世界帝国の王権推移の歴史

【ヘブライ語部分】

8章 幻の解き明かし 世界帝国の王権推移の歴史

9章 「エレミヤの七十年」の解き明かし—悔い改めの祈り（9:2-19）

—「聖なるイール」「イールと聖なる所」（9:16, 24, 26）

—「七十週」「六十二週」「七週」

10-12章 幻の解き明かし 世界帝国の王権推移の歴史

このような囲い込み構造の中核部分に当たる4章と9章に、「イール」が「עִיר」と組みで置かれているのである。少なくとも原語で一気読み聞きする読者／聴衆にとっては、意味を響き合わせるに十分な類似である。偶然ではないだろう。ダニエル書の著者／最終編者が意図なしに放置しただけとは考えづらい。アラム語「聖なるイール（見張りの天使）」とヘブライ語「聖なるイール（都）」は、意味の重ね合わせを意図して用いられた言い回しに違いない。その意味の重ね合わせのために、ダニエル書のアラム語とヘブライ語という二言語が必要だったとみるのが妥当なのではないだろうか。

3. ヘブライ語「イール（עִיר）」とアラム語「イール（עִיר）」

では、具体的にどのような意味の重ね合わせが仕組まれていると考えられるのか。その考察のために、まずヘブライ語とアラム語それぞれの「イール（עִיר）」の意味を、辞書とコンコーダンスの情報から確認しておく。

1) ヘブライ語「イール（עִיר）」

ヘブライ語「イール」は、ほぼ例外なく「町／都」を意味する語で、旧約聖書にかなり頻繁に出現する語である。聖書ヘブライ語辞書 BDB は、「町／都」

を意味する語「イール」について、語根不明の女性形名詞で、旧約聖書に1093箇所用例があると記載している⁶⁾。BDBは、語根 עור (目を覚ます)に由来し「(恐怖による)動揺」を意味する男性名詞「イール」を別の語として挙げているが、それは旧約聖書にわずか2箇所用例しかない⁷⁾。古典ヘブライ語辞書 Clines は、「町／都」を意味する女性名詞「イール」以外にも、様々な語源由来で様々な意味をもつ男性名詞「イール」を9種類挙げているが、それぞれの用例数もごく僅かにすぎない⁸⁾。

「イール」は、ヘブライ語で「町／都」を表すのに唯一ではないが圧倒的に多く用いられている語であることも付け加えておく。「町／都」を意味する他のヘブライ語「キリヤー (קִרְיָה)」は、旧約に30箇所しかない⁹⁾。旧約に類

6) *Brown-Driver-Briggs Hebrew and English Lexicon: With an Appendix Containing the Biblical Aramaic* (Massachusetts: Hendrickson Publishers, 1906), p.746. また、BDBによれば、「יהוה (アドナイ、主)」の用例6823箇所、「אֶרֶץ (エレッツ、地)」の用例2407箇所、「הַר (ハル、山)」の用例558箇所、「שָׁמַיִם (シャーマイーム、天)」の用例421箇所、「ירושלם (エルサレム)」の用例644箇所である。1093箇所ある「町／都」を意味する「עיר」が、旧約聖書に、いかによく登場する語であるかがわかるであろう。L. A. Mitchelの聖書ヘブライ語学習用の語彙集によれば、1000箇所以上の用例のある語彙は、前置詞や接続詞を除けばわずか34語、多様な活用形で出現する動詞を除けば22語しかない。L. A. Mitchel, *A Student's Vocabulary for Biblical Hebrew and Aramaic*, updated edition (Grand Rapids: Zondervan, 2017).

7) BDB, p.735. その用例は、コンコーダンス Lisowsky によれば Jr 15:8; Ho 11:9 の2箇所のみ。G. Lisowsky, *Konkordanz zum Hebräischen Alten Testament* (Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft, 1958), p.1059.

8) Clinesの古典ヘブライ語辞書には、聖書ヘブライ語に加えて、シラ書、クムラン文書などを含め、紀元2世紀頃までのヘブライ語が収集されている。Clinesの辞書に記載されている名詞「עיר」の意味と用例数は以下の通りである。女性名詞 עיר I) 町、都、旧約1092、シラ書14、クムラン文書類93、碑文9。男性名詞 עיר II) 動揺、興奮、旧約2, III) watcher, 見張りの者、クムラン2, IV) 侵入、襲撃、旧約2, V) 火炎、旧約3, VI) 奥の空間、旧約2, VII) 守護者、神々、旧約2, VIII) 敵、旧約1, IX) 呪い、旧約2, X) 小さなくほみ、旧約4。男性名詞の用例の幾つもが、多様な解釈として、複数項目に挙げられ数えられている。D. J. A. Clines, Art. "עיר I", "עיר II", "עיר III", "עיר IV", "עיר V", "עיר VI", "עיר VII", "עיר VIII", "עיר IX", "עיר X", *The Dictionary of Classical Hebrew*, Vol. 6 (Sheffield: Sheffield Phoenix Press, 2008), p.368-381.

繁に登場するヘブライ語「イール」は、ほぼ例外なく「町／都」を意味する語であり、そうでない場合にも、ヘブライ語の聞き手／読み手にとっては、「町／都」の意味が少なくとも合わせ浮かぶ語であったに違いない。

2) アラム語「イール (עִיר)」

一方、アラム語「イール (עִיר)」は、アラム語として決して主要な語ではない。以下に示すように、辞書に記載されている「見張りの者／天使」という意味は、非常に限られた用例から導き出されているのである。また、アラム語「イール」には全く「町／都」の意味はない。MTで「町／都」を意味するヘブライ語「イール」は、タルグム／ペシッタのアラム語／シリア語¹⁰⁾では、すべて他の語に(ほぼ全てに「キリヤー (קְרִיָּה)」とその変化形を用いて)訳されている¹¹⁾。

a) 聖書アラム語「イール」

聖書アラム語辞書には、語根 עור (目覚める／見張る)の男性名詞の「目覚めている者／見張りの者／天使」という意味だけが記載されている¹²⁾。「見張

9) BDBはקְרִיָּהについて「עִירの同義語で、主に詩文や形式ばった文体に」使用されていると説明を加えている。コンコーダンス Lisowskyによれば、旧約聖書には30箇所に出現。そのうち幾つもの箇所では、「イール」に並べてその言い換えのように用いられている。Jes 1:26「正義の都 (עִיר)、忠実な町 (קְרִיָּה)」など。BDB, p.900; Lisowsky, p.1283.

10) シリア語はアラム語の一方言。

11) MTでヘブライ語「イール」の聖書箇所(コンコーダンス Lisowskyを利用)について、タルグムおよびペシッタ本文と比較した。タルグムについては Bible Works、ペシッタについては、S. Rubles, *Aramaic Peshitta Full Complete Old Testament Covenant in Hebrew Script* (2022) を用いて確かめた。

12) BDBの聖書アラム語辞書部分には「目覚めていること、目覚めている者、すなわち天使」、Holladayには「目覚める>見張りの者>天使」、聖書アラム語の文法書 Rosenthalの巻末語彙集には「ある種の天使」という意味だけが記されている。聖書アラム語は、MTの Da 2:4b-7:28; Esr 4:8-6:18; 7:12-26; Jr 10:11; Gn 31:47ab に限定のアラム語である。BDB, p.1105; W. L. Holladay, *A Concise Hebrew and Aramaic Lexicon of the Old Testament* (Leiden: E. J. Brill, 1988), p.418; F. Rosenthal, *A Grammar of Biblical Aramaic*, Seventh,

りの者」という呼び方は語源 עור 由来し、「天使」という意味は、ただダニエル書4章のアラム語「イール」3箇所(1)の文脈的意味、すなわち、神の意志決定会議に参加する「天的存在」(Da 4:14)と、その神の意志を告知する天からの「使者」(Da 4:10, 20)だけに由来する。聖書にはダニエル書のこの3箇所(1)にしか、アラム語「イール」の出現はないからである。

b) クムラン文書のアラム語「イール」

クムラン文書のアラム語辞書は、「イール」について、聖書アラム語辞書と同様、「見張りの者(天使)」を意味する語根 עור の男性名詞とだけ記載している¹³⁾。「町/都」の意味はない。クムラン文書のアラム語テキストには「イール」は比較的多く、16用例が数えられている¹⁴⁾。

興味深いのは、この16用例の大部分で、アラム語「イール」は「天から降って人間の女性に子供をさせた墮天使」を指し、そうでなくとも、それとの強い関わりで用いられていることである。用例の含まれる文書のうち、『寝ずの番人の書』と『巨人の書』は、特に「神の子らが人の娘たちのところに入って産ませた」(Gn 6:4)ネフィリム伝承を拡大して描き、悪の起源物語として強調する。『創世記アポクリュフォン』と『ノアの誕生』では、おそらくそのネフィリム伝承の影響下で、ノアに特別なものを感じた父レメクが、ノアは自分の子ではなく天使の子なのではないかという問いを発している。16用例中

expanded edition (Wiesbaden: Harrassowitz Verlag, 2006), p.97.

13) E. M. Cook, Art. “עיר”, *Dictionary of Qumran Aramaic* (Winona Lake: Eisenbrauns, 2015), p.177. このCookの辞書には、主な用例として、Fassberg (TDOT) の16用例のうち9箇所も付記されている。

14) Fassberg (TDOT) によれば、ダニエル書の断片資料を除いて16用例。『寝ずの番人の書』(1En 1-36章)のアラム語断片より10:9; 12:3; 13:10; 22:6に相当する4箇所。『エノク書簡』(1En 91-108章)のアラム語断片より93:2に相当する1箇所。『創世記アポクリュフォン』(1Q20)の2:1, 16; 6:13; 7:2の4箇所。『巨人の書』のアラム語断片(4Q203, 531, 532)に5箇所。『ノアの誕生』(4Q534)に1箇所。『4Qアムラムの幻』に1箇所。S. Fassberg, Art. “עיר”, in H. Gzella eds., M. E. Biddle trans., *Theological Dictionary of the Old Testament* 16 (Grand Rapids: Eerdmans, 2016), pp.564-565.

14 箇所はこの四つの文書の中にある。また、16 用例中少なくとも 10 箇所¹⁵⁾では、「イール」は明らかに「墮天使」を指している。

16 用例中 3 箇所では、「イール」は「墮天使」ではなく、「御心を言葉で伝える神の使者」を指している¹⁶⁾。だからといって、その用例の大部分が「墮天使」を指しているという事実を忘れて、直ちに「イール」を「天使の類を表

15) 墮天使を指す 10 箇所のうち『創世記アポクリュフォン』の 2 箇所と『寝ずの番人の書』の 2 箇所は、「イールたち」による妊娠／子供の誕生をあからさまに描く。(1) apGen 2:1 その妊娠は見張りの者たちに因るのであるか……その胤は聖なる者たちに因るのであるか。(2) apGen 2:16 決していかなる見張りの者たちに因るのでもなく……決していかなる[天]の子らに因るのでもありません。(3) 1En 10:9 寝ずの番人が生ませた子を人間のなかから滅ぼし去れ。(4) 1En 12:3-4 寝ずの番人たちが……聖なる所を去って女どもと墮落し……妻に迎えて墮落しきった生活をしている天の寝ずの番人たちに。『寝ずの番人の書』の 1 箇所では、その仕業故の「イールたち」への叱責を語る。(5) 1En 13:10 天の寝ずの番人たちへの叱責に移った。『巨人の書』の 3 箇所は「巨人たち」「産んだ」「巨人とネフィリム」という言葉と共に語られている。(6) 4Q203 7a:7 巨人たちと見張りの者たち、彼らの仲間皆。(7) 4Q203 7b 1:3 彼らは産んだ、見張りの者から。(8) 4Q532 2:7 巨人とネフィリム……見張りの者たちから。『巨人の書』からの他の 2 用例(部分修正した 4Q531 1:1; 36:1)については、本文を確かめられなかったが、内容的に(6)-(8)と同じ者たちを指すとして、ここに含めた。各用例の本文については、村岡崇光訳「エチオピア語エノク書」日本聖書学研究所編『聖書外典偽典第四巻 旧約偽典Ⅱ』(教文館、1975 年)、pp.161-292, 339-408; L. T. Stuckenbruck, *The Book of Giants from Qumran: Texts, Translation, and Commentary* (Tübingen: Mohr Siebeck, 1997); 守屋彰夫訳「創世記アポクリュフォン」死海文書翻訳委員会訳『死海文書Ⅵ 聖書の再話 1』(ぶねうま舎、2018 年)、pp.1-89 を参照した。

16) 「イール」が「御心を言葉で伝える神の使者」を表している 3 箇所は以下のとおりである。(1)『寝ずの番人の書』から、1En 22:6 み使い(イール、聖なる者)ラファエル。(2)『エノク書簡』から、1En 93:2 天の幻によってわたしに示され、聖なるみ使いたち(イールたち、聖なる者たち)のことはからわたしが学び。(3) apGen 6:13 偉大な見張りの者(イール [עִיר])によって、一人の使者(ツイール [צִיר])を通して……聖なる御方の特使によってわたしに。用例(1)は、「寝ずの番人たちの墮落と彼らへの罰の告知」の物語にあって、「イール」(墮天使)たちに罰を告げ知らせる天使ラファエルを「イール、聖なる者」と称している。用例(2)でも、聖なるみ使いたち(イールたち、聖なる者たち)は、罰を下される天使(1En91:15)との対比の可能性が考えられる。用例(3)では、「使者(ツイール [צִיר])」との言葉遊びのために、「マルアーク (מַלְאָךְ)」ではなく「イール (עִיר)」が用いられたと考えられる。同じ『創世記アポクリュフォン』内に「マルアーク」(15:14)の使用もある。

す一般語」と見なすことには賛成できない。3箇所とも、その「イール」は、墮天使「イール」を物語る中で登場しているのである。墮天使との対照を目立たせる意図で、第一には「天から降ってきた天使」を思い起こさせるアラム語「イール」が用いられたと解釈することも十分可能である。御言葉の使者である天使に対しては、クムラン文書でも、使者を表すヘブライ語と同音同綴同義の「マルアーク (מלאך)」の方がよく用いられている¹⁷⁾。

まとめると、クムラン文書のアラム語「イール」は、聖書アラム語（ダニエル書）と同様、「見張りの者／天使」を意味する男性名詞であるが、一般的に「天使」を表すというよりも、人間の女性に子供を産ませるほどのリアリティーをもって「天から降ってきた天使」を思い起こさせる語だと言えるだろう。

c) 聖書のアラム語翻訳——タルグム／ペシッタのアラム語／シリア語「イール」

旧約聖書のアラム語訳であるタルグム¹⁸⁾には、「イール (עיר)」は全く見つかからない¹⁹⁾。つまり、タルグムを持たないエズラ・ネヘミヤ記とダニエル書以外の全旧約文書のアラム語訳には「イール」は用いられていない。アラム語の一方言であるシリア語訳聖書ペシッタ²⁰⁾では、「イール」はダニエル書4章

17) Cookのクムランのアラム語辞書には、「マルアーク」について用例が8つ紹介されているが、どれもミカエル、ガブリエルなどの神の使者の役割の天使を示している。『アラムの幻』から2箇所、『創世記アポクリュフォン』から1箇所、『天使ミカエルの言葉』から2箇所など。M. Cook, Art. “מלאך”, *Dictionary of Qumran Aramaic*, p.139.

18) タルグムはタナハの説明付きアラム語訳。ヘブライ語朗読を理解できなくなった捕囚後時代の聴衆に向けて典礼利用のためにアラム語訳が作られ、最初は口頭だけだったが、紀元後2-3世紀以降に文書化された。エズラ・ネヘミヤ記とダニエル書を除く旧約の全書物は、タルグムを持っている。R. C. ムーサフ・アンドリーセ、市川裕訳『ユダヤ教正典入門——トラーからカバラまで』（教文館、1990年）。

19) BibleWorksを用いて全タルグム文書について文字列「עיר」を検索して出た結果は1C 4:12の人名「イル・ナハシュ」のみ。つまり、人名以外には、タルグムには「イール (עיר)」は全く用いられていない。

20) シリア語は、アラム語の一方言で、東方キリスト教の主要典礼言語となった。ペシッタはシリア教会の標準聖書。ペシッタの旧約部分は、紀元後2世紀頃までにヘブライ語聖書から翻訳されたと推測されている。S. A. Kaufmann, Art. “Language (Aramaic),” in D. N.

10, 14, 20 節の 3 箇所だけに確認され、その他の箇所には用いられていない。旧約聖書には「神の御使い／天使」が何度も描かれているにもかかわらず、そのアラム語訳／シリア語訳には「イール」がダニエル書 4 章以外には用いられていないのである。

「御使い／天使」に対して、MT のヘブライ語では常に「マルアーク (מַלְאָךְ)」が用いられているが、タルグムでもペシッタでも例外なく、その同音同綴同義のアラム語／シリア語「マルアーク (מַלְאָךְ)」で訳されている²¹⁾。加えて、新約の「天使」(ἀγγελος) に対しても、ペシッタでは例外なく「マルアーク」で訳され、「イール」は全く用いられていない²²⁾。旧約聖書においてアラム語「イール」はただ、MT のアラム語部分とペシッタの中のダニエル書 4 章 10, 14, 20 節の 3 箇所に限られているのである。シリア語辞書が「イール」の意味を、聖書アラム語辞書とほぼ同じに記載している²³⁾ のは、両者ともただダニエル書 4 章の 3 箇所だけから意味を取っているからである。

Freedman, *Anchor Bible Dictionary*, Vol. 4 (New York: Doubleday, 1992), pp.173-178; 守屋彰夫「古代語訳(旧約)」樋口進、中野実監修『聖書学用語辞典』(日本キリスト教団出版局, 2008), pp.120-122.

21) MT ヘブライ語で「מַלְאָךְ」の 213 箇所中、御使いを意味する 112 箇所のうちタルグムをもつ 100 箇所について確かめたところ、99 箇所でタルグムもペシッタも「מַלְאָךְ」であった。「עִיר」は全く用いられない。ヘブライ語「מַלְאָךְ」が人間が遣わす使者を意味する場合は、ほぼ例外なくタルグム／ペシッタでは「אַזְנָא / אִיזְנָא」に訳されている。

22) ἀγγελος 177 箇所中、人間の使者を指す 3 箇所以外の 174 箇所は、ペシッタでは例外なく מַלְאָךְ に訳されている。数箇所でその語の省略や追加があるものの、他の語での翻訳はない。W. F. Moulton, A. S. Geden, Art. "ἀγγελος", *A Concordance to the Greek Testament* (Edinburgh: T&T Clark, 1978), pp.8-10; 新約のペシッタ本文は <https://www.syriac bible.nl/> 参照。

23) Smith のシリア語辞書には、項目「עִיר / עִירָא / עִירְתָא」の意味を「寝ずの番をする(者)、見張りの者」と説明し、動詞 עִיר に関連していると記している。J. P. Smith, *A Compendious Syriac Dictionary* (Oxford: Clarendon Press, 1903), p.412.

d) タルムードとミドラーシュ²⁴⁾の「イール」

Jastrow のタルグム・タルムード・ミドラーシュの辞書には、「イール (עיר)」について、「守護者、天使」の意味をもつ男性名詞「עיר」と、「町、都」の意味をもつ女性名詞「עיר」と並べて記され²⁵⁾、主な用例も記載されている。男性名詞であるアラム語「イール」²⁶⁾の使用については、タルムードとミドラーシュでもかなり限られていることが、辞書に挙げられた3つの用例²⁷⁾から、容易に推測できる。すなわち、単数形「イール」について、(1)「天使」とも「町」とも解釈可能な「イール」の用例、(2)「イール」に「町」と「神的存在」の二重の意味を意図的に持たせる用例、の2つがミドラーシュから挙げられている(後述)。純粹なアラム語的意味「天使」の用例はない。「町」の意味を併せ持たない用例としては、複数形「イーリーン (עירין)」²⁸⁾の形で、Da 4:14の引用句「בגזרת עירין פתגמא ומאמר קדישין שאלתא (この要請はイールたちの決定により、この事柄は聖なる者たちの命令による)」だ

24) タルムードとミドラーシュはヘブライ語とアラム語で書かれたユダヤ教の聖典。タルムードは紀元5世紀末頃までに、ミドラーシュは紀元5世紀から中世に文書化された。ムーサーフ・アンドリーセ『ユダヤ教正典入門』。

25) タルムードとミドラーシュは、強く相互影響されたアラム語とヘブライ語で書かれているため、Jastrowの辞書では、ヘブライ語(ヘブライ語要素の強い語)もアラム語(アラム語要素の強い語)も一緒に並べた記載になっている。M. Jastrow, Art. "עיר", *Dictionary of the Targumim, the Talmud Babli and Yerushalmi, and the Midrashic Literature* (New York: Hendrickson Publishers, 1943, 2006), p.1075.

26) 正確な言い方ではないが、ここでは便宜上「町/都」の意味の女性名詞(聖書ヘブライ語と表示)をヘブライ語「イール」、「守護者、天使」の意味の男性名詞をアラム語「イール」と記すことにする。

27) 辞書 Jastrow は「עיר I」について次の3つの用例を挙げている。(1) Ps 118:8 に対する Midrash Tehillim ... ולא ירד עמו לא עיר (ולא קדיש) ולא שרע (プーバーの編集)、(2) Ps 1 に対する Midrash Tehillim עיר אלא אלוה (ואין עיר) を Gn 11:4 「さあ、町を建てよう」に絡めた「עירの言葉遊び」として、(3) Pesachim 33a:11 בגזרת עירין פתגמא ומאמר קדישין שאלתא (Da 4:14 からの引用)。Jastrow, p.1075.

28) 単数形「イール (עיר)」は、アラム語とヘブライ語で同音同綴だが、複数形ではアラム語「イーリーン (עירין)」に対してヘブライ語「アーリーム (ערים)」で綴りも音も異なる。

けが提示されている。また、複数形「イーリーン」については、タルグムとミドラーシュ全体の検索を行ったところ、ほとんどがこの Da 4:14 の引用句であり、その他はごく僅かであることも確かめた²⁹⁾。タルムード、ミドラーシュでも、「見張りの者／天使」の意味をもつアラム語「イール」は、ダニエル書4章の引用にほぼ限られているのである。

このように、「見張りの者／天使」の意味をもつアラム語「イール」は、クムラン文書を除けば、ダニエル書4章とその翻訳や引用にほぼ限られていることが確かめられた。アラム語「イール」は、ダニエル書4章とクムラン文書に集中して出現する語であり、一般的に「天使」を指す語ではない。もちろん、言語は時代と共に変遷するのが常であり、ダニエル書とクムラン諸文書はほぼ同時代に年代づけられる³⁰⁾が、「イール」がその時代には「天使」を指す一般的なアラム語だったとも考えにくい。ダニエル書の時代には、旧約諸文書のタルグムは、まだ書かれていなかったとはいえ、典礼使用での必要のためにある程度は出来上がっていたはずである。「イール」が一般的に「天使」を表す語だったならば、タルグムやペシッタに少しは反映するはずである。よって、アラム語「イール」は、ダニエル書の書かれた時代にも「天使一般」を表す言葉ではなく、何か特別な意図をもってダニエル書4章に組み込まれた言葉だと考えられる。

29) アラム語「イール」複数形については、<https://www.sefaria.org/>のタルムードとミドラーシュの全文書に対して、文字列「עִירִין」を検索して確かめたところ、タルムードでは、Da 4:14のこの6語句が2箇所（Sanhedrin 38b:16とPesachim 33a:11）に見つかり、他には「עִירִין」は見当たらなかった。ミドラーシュには、Da 4:14この6語句引用14箇所、5語句1箇所、3語句12箇所、2語句2箇所、その他11箇所。「עִירִין」のうち4分の3がDa 4:14の引用句であり、その他は僅かだけであった。

30) クムランの諸文書は、紀元前2世紀から後1世紀に年代づけられる。ダニエル書は前164年頃の著と推測されているので、ほぼ同年代。J. J. コリンズ、山吉智久訳『『死海文書』物語——どのように発見され、読まれてきたか』（教文館、2020）、p.3. 他。

3) 「イール (עיר)」の二重の意味

ヘブライ語「イール」は、ほぼ例外なく「町／都」を意味する語であるが、一方アラム語「イール」には「町／都」という場所の意味は全くなく、何らかの天的存在を指していることは確かである。しかし、アラム語「イール」とヘブライ語「イール」は同音同綴語である。それが一緒に用いられる時、響き合いや交錯が起こる。

タルムードやミドラーシュは、アラム語とヘブライ語の二言語がある程度入り混じった形で書かれているが、そこには意図的に「イール」に二重の意味を持たせていると思われる箇所がある。Jastrow の辞書がミドラーシュから、「עיר I」の単数形の用例として挙げた2つの例³¹⁾がそうである。

(1) Ps 118:8 に対するミドラーシュ・テヒリームの一節「ולא ירד עמו לא ולא שרע ... (ולא קדיש) וְעִיר」について Jastrow の辞書は、「イール = 守護天使」「セラフ = 天的存在の1つ」として、「彼は共に降らなかった。守護天使も、セラフも……」というブーバーの解釈を採用して、これをアラム語「イール」の第一の用例に挙げている。しかし、Sefaria.org は「イール = 都」「セラフ = 火」として「彼は共に降らなかった。都も、聖所も、火も…… (彼を傷つけることはできなかった)」という訳を紹介している³²⁾。その両方、すなわち、「天使もセラフも彼 (アブラハム) と共に降らなかった」と「都も火も彼を傷つけることはなかった」の両方の意味を意図的に併せ持たせたのかもしれない。

(2) Ps 1 に対するミドラーシュ・テヒリーム (1:11) の一節「ואין עיר אלא אלה」を、Gn 11:4「さあ、イール (町) を建てよう」に絡めた「イールの言葉遊び」として、「イール (町, 天使) は神的存在／偶像を指す」と読む。「イール」にわざと「町」と「天的存在／天使」の二重の意味を持たせることで論理を展開している。

31) Jastrow, p.1075.

32) https://www.sefaria.org/Midrash_Tehillim_118?lang=bi

このように「イール」を二重の意味で読むことは、ミドラーシュの時代になって初めてではないだろう。Dahood は、ヘブライ語だけで書かれた旧約文書の幾つかの「עִיר」についても、文章構造の視点から、「町／都」という意味よりもむしろ、神々や守護神のような天的存在の意味にとるか、あるいは「町／都」と「天的存在」の二重の意味を持つと解釈すべきと提案している。彼は、Ps 9:7の「あなたが滅ぼした עִירִים」とは、「町々」よりも「守護神たち」だと解釈している³³⁾。また、Mi 5:13では、破壊される「עִירָךְ」は、引き倒される「あなたのアシェラ像 (אֲשִׁירֶיךָ)」と並行であることから³⁴⁾、単に「町々」ではなく、「神々」の意味も併せ持つという解釈を提案している。また、Olson は、Jr 4:26の³⁵⁾「町はことごとく (כָּל-עִרֶיךָ)」を「すべての見張りの者たち」と二重に読むことで、Jr 4:5-31の託宣が第一エノク書の『寝ずの番人の書』と類似すると提案している。

ダニエル書は、アラム語とヘブライ語の二言語を用いて書かれている。そのアラム語部分4章にも、ヘブライ語部分9章にも、聖なる「イール」が3回ずつ登場している。二重の意味の響き合いを期待した意図的言い回しに違いない。

4. 聖なる「イール (見張りの天使)」と聖なる「イール (都)」

1) アラム語「イール (見張りの者)」 + 「カッディーシュ (聖なる)」

アラム語「イール」の全3箇所は4章にあつて (4:10, 14, 20), 「聖なる」を

33) Ps 9:7 敵は永遠に廃虚となり果て、あなたが滅ぼした幾つもの町 (עִירִים) は、その記憶さえ消え去った。M. J. Dahood, *Psalms I* (Anchor Bible) (Garden City: Doubleday, 1966) 56; R. Murray, "The Origin of Aramaic 'îr, Angel," *Orientalia* 53 (1984): 303-317.

34) Mi 5:13 私は〔あなたの〕アシェラ像 (אֲשִׁירֶיךָ) を引き倒し、あなたの町 (עִירָךְ) を破壊する。Murray, "The Origin of Aramaic 'îr, Angel," pp.303-317.

35) Jr 4:26 私は見た。実り豊かな地は荒れ野に変わり、町はことごとく (כָּל-עִרֶיךָ)、主の前に、主の燃えさかる怒りによって打ち倒されていた。D. C. Olson, "Jeremiah 4.5-31 and Apocalyptic Myth", *JOT* 73 (1997): 81-107.

意味する「カッディーシュ (קדיש)」との組み合わせで用いられている。

Da 4:10 イールとカッディーシュ (עיר וקדיש)³⁶ が天から降りて来た。

Da 4:14 イール pl³⁷ (עירין)³⁸ の決定……カッディーシュ pl (קדישין)³⁹
の命令による

Da 4:20 イールとカッディーシュ (עיר וקדיש)⁴⁰ が天から降りて来る

「イールとカッディーシュ (見張りの者, 聖なる者/聖なる見張りの天使)」とは、天から降って来て、この木 (=王権) を切り倒せ、という主の御心を告げる者」(4:10, 20) であり、天におけるその御旨の決定に参加する者 (4:14) である。

「イールとカッディーシュ (עיר וקדיש)」という、接続辞「ו (and)」で結ばれた言い回しは少々不思議である。「イール (見張りの者)」が、悪をもたらす神に叱責される存在ではなく、神の御心に沿った「聖なる」天的存在であることを強調したいなら、接続辞なしの「עיר קדיש」が一般的であろう。にもかかわらず、どちらも単独で天的存在を指しうる「イール (見張りの者)」と「カッディーシュ (聖なる者)」を接続辞「ו (and)」で結んだ「עיר וקדיש (見張りの者, 聖なる者)」と記しているのには、何か理由があるのではないだろ

36) עיר וקדיש : (聖書協会共同訳) 見張りの者, 聖なる者, (新共同訳) 聖なる見張りの天使, (テオドチオン) ιρ και ἅγιος (イルと聖なる者), (古ギ) ἄγγελος (一人のみ使い), (ペシッタ) עירא וקדישא. 類似が分かりやすいように、シリア語もヘブライ語アルファベット文字で記す。なお、テオドチオン訳と古ギリシア語訳の日本語訳は、秦剛平訳『七十人訳ギリシア語聖書 ダニエル書』(青土社, 2018年)。

37) 複数形を pl で記すことにする。アラム語「イール (עיר)」の複数形「イッリール (עירין)」を「イール pl」と記す。

38) עירין : (聖書協会共同訳) 見張りの者たち, (新共同訳) 見張りの天使ら, (テオドチオン) ιρ (イル), (古ギ) —, (ペシッタ) עירא

39) קדישין : (聖書協会共同訳) 聖なる者たち, (新共同訳) 聖なる者ら, (テオドチオン) ἅγιων (聖なる者たち), (古ギ) —, (ペシッタ) קדישא

40) עיר וקדיש : 注 36 に同じ。

うか。同じ言い回しが、クムランからのアラム語テキストとして、1En 22:6「み使い(ラファエル)」と1En 93:2「聖なるみ使いたち」の2箇所で見つかったことから、Cookはこれを、「アラム語特有の同格表現」と説明している⁴¹⁾。ただし、接続辞「ܐܘܪܝܢ (and)」による同格表現は、他の語には見当たらない。「イール」が先、「カッディーシュ」が後という順番まで保ち、2つともエノク伝承の範囲内にある。「イールとカッディーシュ」は、「アラム語特有の」文法的同格表現というよりも、「エノク伝承特有の」言い回しと言った方がよさそうである。エノク伝承を思い起こさせ、天から降って来た墮天使を思い起こさせる。エノク伝承で「天から降って来る」のは、人間の女性と交わって子どもを産ませた墮天使たちであって、神の御心を告げて墮天使たちを裁く「イールとカッディーシュ」は降って来ない。しかしダニエル書4章では、「イールとカッディーシュ」が、天から降ってきて、主の御心を告げるのである。

この「イールとカッディーシュ」は通常、二人の天的存在ではなく、ひとりの天的存在だと理解されるが、その理由は、第一にはその者が「天から降って来る」という分詞形が三人称単数であること、加えて、その古ギリシア語訳が「ἄγγελος 天使」だからである。ただし、テオドチオン訳は、アラム語「イール」を音訳し、「ܐܝܪ ܐܘܪܝܢ ܐܝܠܘܢ ܐܘܪܝܢ ܐܝܠܘܢ ܐܘܪܝܢ ܐܝܠܘܢ」と直訳している。MTからのギリシア語訳に取り組んだ訳者は、この不思議な表現に、翻訳によって消してはならないダニエル書解読の鍵を見ていたのではないだろうか。

2) ヘブライ語「イール(都)」+「コーデシュ(聖なるもの/聖所)」

ヘブライ語「イール」の全6箇所中5箇所は9章にあって、そのうち3箇所(9:16, 24, 26)は、「聖なるもの/聖なる場所」の意味を持つ「コーデシュ(קֹדֶשׁ)」との組み合わせで用いられている。

Da 9:16 あなたのイール(עִירְךָ), あなたのコーデシュの(קֹדֶשְׁךָ) 山エ

41) Cook, *Dictionary of Qumran Aramaic*, p.177.

ルサレムから⁴²⁾ ……

Da 9:24 あなたの民とあなたのコーデシュのイール (עיר קדש)⁴³⁾ に対して……

Da 9:26 そのイールとそのコーデシュ (העיר והקדש)⁴⁴⁾ を次の君主の民が破壊する。

「コーデシュ (קדש)」を用いた「聖なる山」⁴⁵⁾ は、特に祭儀に関係してエルサレムを指し示す箇所によく出て来る。「聖なる都」⁴⁶⁾ はそれほど多くないが、エルサレムを指し示す言い回しであることは確かであろう。特にネヘミヤ記では、地上に実際に存在する「エルサレム」について「聖なる都／町」と語っている。

ダニエル書9章は、エレミヤ書の「七十年」の再解釈であり、「エルサレム」という語も連ねて語られている。その中で、「あなたの都 (עיר)，あなたの聖なる (קדש) 山エルサレム」(9:16) は、ダニエルの口の祈りにあつ

42) עיר קדש : (聖書協会共同訳) あなたの都、あなたの聖なる山エルサレムから、(テオドチオン) あなたさまの都エルサレムから、あなたさまの聖なる山から、(古ギ) あなたさまの都エルサレム (と) あなたさまの聖なる山から、(ベシッタ) מן מדינתך ארשם ומן טועך קדישא

43) עיר קדש : (聖書協会共同訳) [あなたの] 聖なる都、(新共同訳) [お前の] 聖なる都、(テオドチオン) τὴν πόλιν τὴν ἁγίον σου (おまえの聖なる都)、(古ギ) τὴν πόλιν Ζιω (都シオン)、(ベシッタ) קריתא דקודשך

44) העיר והקדש : (聖書協会共同訳、新共同訳) 都と聖所、(テオドチオン) τὴν πόλιν καὶ τὸ ἅγιον (都と聖所)、(古ギ) τὴν πόλιν καὶ τὸ ἅγιον (都と聖所)、(ベシッタ) קריתא דקודשא

45) Ps 2:6 私が聖なる山シオンで、わが王を立てた、と。Sa 8:3 エルサレムは信頼に値する都と呼ばれ、万軍の主の山は聖なる山と呼ばれる。Jl 4:17 わが聖なる山シオンに住むことを。エルサレムは聖なる地となり、他。

46) Jes 48:2 聖なる都に属する者と称され、Jes 52:1 シオンよ。輝く衣をまとえ、聖なる都、エルサレムよ。Jes 64:9 あなたの聖なる町々は荒れ野となった。シオンは荒れ野となり、エルサレムは荒廃し、Sa 8:3 エルサレムは信頼に値する都と呼ばれ、万軍の主の山は聖なる山と呼ばれる。Ne 11:1 十人のうち一人が聖なる都エルサレムに来て住み、Ne 11:18 聖なる町にいるレビ人の合計。

て、神の救いの対象である。そこから神が怒りを去らせ、救ってくださるよう願っている。「聖なる都 (עִיר קְדוֹשָׁה)」(9:24) は、御使いガブリエルを通して語られた神の救いの御心であり、七十週の後には救われると語る。「都と聖所 (הָעִיר וְהַקְּדוֹשׁ)」(9:26) という「都 (הָעִיר)」と「聖所／聖なるもの (הַקְּדוֹשׁ)」が接続辞「ו (and)」で結ばれた表現は、ヘブライ語にはここしかない。

Da 9:26 の「イールとコーデシュ (הָעִיר וְהַקְּדוֹשׁ 都と聖所)」は、Da 4:10, 12「イールとカッディーシュ (עִיר וְקַדְיִישׁ 見張りの者、聖なる者／聖なる見張りの天使)」を意識した意図的な言い回しに違いない。エノク伝承の「聖なるイール (見張りの天使)」を思い起こさせるために、9章でも「イール (都)」と「聖所」を接続辞「ו (and)」で結んで表現しているのだろう。ただし、ヘブライ語でも、「都」と「聖所／聖なるもの」を同格と取ることも不可能ではない。とはいえ、どちらも「エルサレムでの祭儀復興」を意味しているはずなので、同格の並置としても、「都」及び「聖所」としても、さほど違いはない。Da 9:26 の「イールとコーデシュ (הָעִיר וְהַקְּדוֹשׁ 都と聖所)」は、Da 4:10, 12 の「イールとカッディーシュ (עִיר וְקַדְיִישׁ)」を意識した意図的な言い回しに違いない。

ダニエル書4章の「聖なるイール (見張りの天使)」と9章の「聖なるイール (都)」は、意味の響き合いを狙って仕組まれた言い回しであり、そのために、ダニエル書はアラム語とヘブライ語の二言語で書かれる必要があったと言えるだろう。

5. おわりに——「聖なるイール (都)」と「聖なるイール (見張りの天使)」の響き合いから

アラム語とヘブライ語という二言語性を通して、ダニエル書9章の「聖なるイール (都)」エルサレムの回復は、4章の「聖なるイール (見張りの天使)」の神話的表象と重ねられている。

ダニエル書の著者は、祭儀復興の希望を単なるこの世的復興に留まらせない

ために、神話的表象を重ねたのかもしれない。目の前の祭儀回復を熱望しつつも、地上の現実に留まらない終末論的希望へとつなげる意図があったと説明することもできる。

しかし、「聖なるイール（見張りの天使）」という言い回しが「エノク伝承」と強く結びついていることを重視するならば、むしろ、ダニエル書の著者は「聖なるイール（都）」の回復の実現の確信をエノク伝承の再解釈によって得たと考える方がよいだろう。4章の「イールとカッディーシュ（見張りの者、聖なる者／聖なる見張りの天使）」は、アラム語としても特殊な言い回しで、エノク伝承の「天から降って来た墮天使」を思い起こさせる。それが特によく描かれている『寝ずの番人の書』は、ミリクによれば紀元前3世紀の著である⁴⁷⁾。ダニエル書が書かれた時代には、エノクの物語、特に『寝ずの番人の書』の内容は、民間伝承として広く知られていたに違いない。激しい神殿冒瀆と宗教迫害の時代、ダニエル書の著者は、「聖なるイール（都）」の回復を熱望する中で、「イール（墮天使）」のエノク伝承から、「聖なるイール（都）」回復の希望をリアリティーをもって受け取り、励まされたに違いない。「イール（天使）」は、人間の女性に子供を産ませるほどの現実味をもって地上に降って来た。「聖なるイール（天使）」の到来は確実である。「聖なるイール（都）」エルサレムの祭儀回復は確実である、と。

少なくとも、ダニエル書の「聖なる都」と「聖なる天使」が重ねて読まれていったことは、新約のヨハネ黙示録が証言している。「聖なる都、新しいエルサレムが……天から降って来るのを見た」(21:2)と。

(やだ・ようこ)

47) 『寝ずの番人の書』(1En 1-36章)について、ミリクは紀元前3世紀頃の著と見ている。J. T. Milik, *The Book of Enoch-Aramaic Fragments of Qumrān Cave 4* (Oxford: Clarendon Press, 1976), pp.22-41. 特に p.28; 村岡崇光「エチオピア語エノク書概説」『聖書外典偽典第四巻』p.164. また Sacchi は 1En 6-36 章部分を紀元前4世紀と推測している。Olson は、口伝としてはもっと以前からあったと推測している。P. Sacchi, *The History of the Second Temple Period*, JSOTSup 285 (Sheffield: Sheffield Academic Press, 2000), p.174; Olson, "Jeremiah 4.5-31 and Apocalyptic Myth".